

## 贈与としての情報 Information as Gift

○曾我千亜紀<sup>1</sup>, 井上寛雄<sup>2</sup>, 山田庸介<sup>3</sup>, 霜山博也<sup>3</sup>, 大澤健司<sup>3</sup>, 米山優<sup>3</sup>  
Chiaki SOGA, Hiroo INOUE, Yosuke YAMADA, Hiroya SHIMOYAMA,  
Kenji OSAWA and Masaru YONEYAMA

<sup>1</sup>愛知県立芸術大学非常勤講師

Aichi Prefectural University of Fine Arts and Music

<sup>2</sup>至学館大学非常勤講師

Shigakkan University

<sup>2</sup>名古屋大学大学院情報科学研究科

Nagoya University, Graduate School of Information Science

**Abstract** How does the actual information-oriented society face the issues of resources limitation or ethics while protecting its advantages, such as freedom and diversity? We will try to resolve these issues through a positive thinking process in which we will analyze the concept of information. It is important to analyze nowadays communication as a gift rather than as a well-balanced exchange. Indeed, seeing communication as a gift, and knowing what is given in return, is a process that will show us its new value and its rethought meaning, both ideas that cannot be reduced to necessity or the money economy.

キーワード 贈与, コミュニケーション, 情報体, 倫理, 〈消費〉

### 1. はじめに

現在の高度な情報化/消費化社会は、様々な問題を内包している。例えば貧困や搾取、南北の格差、資源の有限性といった問題である。しかしながらこれら諸問題を解決するために、資本制システムを根本から転覆させようと企図することはもはや現実的ではないであろう。なぜなら、情報化/消費化社会はその多様性と自由によって人々を惹きつけ、その魅力は欠点を補ってなお余りあるからである。したがって私たちに突きつけられているのは、今ある社会の〈自由〉や〈多様性〉を失うことなく上述の諸問題を解決する途はありうるかという問いである。ここで私たちは、見田宗介の提起した高度な情報化/消費化社会における限界をいかに乗り越えるかという問題意識を共有する（見田、2011:3）。見田は、情報概念を積極的に捉え直すことが、限界を切り拓く一つの可能性であると主張する。情報概念を再問題化すること、しかも情報を敢えてポジティブなものに見なすことが要請されているのである。このような問題意識は、人々の為している経済活動やコミュニケーションが最低限の生命維持を担うものに留まっていないことこそが実は倫理的な次元へと繋がるという、一見矛盾した側面を支持するように見える。だが、人間を人間たらしめるのは、単なる必要性を超えるもの、いわば奢侈なのである。社会を真に豊かなものにするために必要となるのは一体何であろうか。

### 2. 無際限な情報空間

#### (1) 情報概念

有限な資源に対して、ほぼ唯一対抗しうる無限な資源が情報である。無際限に広がる情報空間において、情報はある種の自立した自己準拠システムによって肥

大していく。それが経済と結びつくと、時には歯止めの効かない流れとなる。例えば、人々が商品を買うとき、有用性や合理性のレベルだけで選択をするわけではない。デザインやブランド、伝統や歴史、流行といった付加価値が消費の対象となる。それが行き過ぎすぎれば、金融資本主義における貨幣が貨幣を生むような抽象的な世界が展開される（米山、2011:398）。実体のない価値が膨れ上がっていくのは、価値が事物それ自体に宿っているわけではないからである。事物を取り巻く情報が価値を生成しているのであって、そのうえ情報は無際限に増大しうる。その極端な形態では、事物はもはや必要とされず、抽象的な情報（ここで言えば抽象的な貨幣価値）が独立して肥大していく。

しかし、この極限へと押し進められる情報の性質は一方的に否定されるべきではない。上で述べたように人間は付加価値を消費するが、だからこそフェアトレード商品が成立したりエコロジカルな生産過程が評価されえたりするからだ。差異化をどこまでも展開しうる情報は、いわば限定された資源しか持ち得ない人間にとって唯一の無際限の資源となりうるのである。

私たちは敢えて、この無尽蔵に流出する泉である情報を積極的に捉えることにしたい。そのためには、貨幣経済によって覆い隠されてしまったもう一つの交換の形、すなわち贈与について論じなければならない。実際、私たちのコミュニケーションの根底にあるのは贈与と返礼としての情報と倫理の形なのである。この点を明らかにするために、まずはモースによる『贈与論』の議論を見てみたい。

#### (2) 贈与

モースが『贈与論』において言及しているマオリ族の例は、贈与のシステムを考えるために、しかも情報

論と関連させて論ずるために非常に有効である。彼らは霊的な概念「ハウ」を持っている。この霊的概念は贈与された物品に宿るものとして考えられている。引用しよう。

ハウは吹いている風ではありません。全くそのようなものではないのです。仮にあなたがある品物（タオンガ）を所有していて、それを私にくれたとします。あなたはそれを代価なしにくれたとします。私たちはそれを売買したのではありません。そこで私がしばらく後にその品を第三者に譲ったとします。そしてその人はそのお返し（ウトゥ）として、何かの品（タオンガ）を私にくれます。ところで、彼が私にくれたタオンガは、私が始めにあなたから貰い、次いで彼に与えたタオンガの霊（ハウ）なのです。（あなたのところから来た）タオンガによって私が（彼から）受け取ったタオンガを、私はあなたにお返ししなければなりません。（Mauss、1923-1924:15、傍点は引用者）

「ハウ」を祓うためには返礼をしなければならない。返礼しなければならないと感じるこの「負い目」がいわゆる反対給付義務（contre-prestation）である。このような義務を果たすために返礼は贈与されてきた道筋を逆に辿り、最終的に贈与と返礼の円環は閉じられる。

重要なのは以下の点である。誰かが反対給付義務を感じるまで、すなわちその物品が〈贈与である〉と認識されるまで、物品は次々と別の人間へと受け渡されていくということ。言い換えれば、その物品を〈贈与である〉と認め、返礼を始める人間が存在して初めて、物品は遡って贈り物であると見なされ、遡及的な返礼が始まるのである。返礼が発端の人間に到達するに至って、循環の輪は閉じられる。こうして「ハウ」は祓われる ---- いわば負い目は支払いを完了する。

第二に、返礼は直接なされるわけではなく、必ず第三者あるいはさらに別の人間たちを介することである。もし二人の人間あるいは二つの共同体間で贈与と返礼がなされるならば、単なる事物の交換として終わってしまうであろう。しかし贈与と返礼のネットワークは、三人あるいはそれ以上の人間を巻き込むのである。

モースは返礼を義務として感じ、最終的に円環を閉じられることに意義を見出す。返礼は強制ではなく、例えば法によって規定されるわけではないが、人は返礼せねばならないと感じるのである。ある種の負い目が人を動かす。だからこそ、贈与と返礼は絶え間なく繰り返され、円環が閉じられることによってそこに一つの共同体や社会が生成するのである。

私たちはこのような贈与と返礼のあり方を、情報コミュニケーションと結びつけて発展的に展開することを試みる。だがモースとは異なり、敢えて円環を開いたままにするあり方を考えてみたい。

何らかの主体がある情報を自分に対する贈与だと見なすことによって初めて、情報の送り手と受け手、情報それ自体、情報が生成している場といったものが生まれる。このとき贈与とその返礼の円環は必ずしも閉

じられる必要はない。むしろ、情報の受け取りと、返礼としての贈与は、全く別の主体に対して別の場面において行われる方が望ましい。そうでなければこのような交換は容易に貨幣経済に巻き込まれ、従来の価値基準に絡め取られてしまうだろう。円環を敢えて閉じさせないことで、どこまでも続いていく贈与の連なりが情報を無際限に増殖させる一つの契機となる。そもそも、返礼を自らに何かをもたらしてくれたその相手自身へと返そうとしたところで、それが不可能な場合も少なくない。なぜならば、私たちが贈り物として受け取る情報（それは芸術作品であつたり、テキストであつたりしよう）の作者は、既に亡いかも知れず、しかしながら私たちは彼らに対する感謝の気持ちを抱きながら新たな情報や作品を生み出すことができるからである。このように、情報を贈与として受け取り、そこから別の情報を生み出し、他者へと送る=贈ることは、コミュニケーションの一つの基盤をなし、情報が行き交うための大きな原動力である。

もう一つ付け加えよう。先に述べた情報生成の場とは、必ずしも物理的空間を指すわけではない。なぜなら、物理的に空間を共有していたとしても、情報を受け取ることでできない主体もありうるからである。そのとき、情報空間は〈複数〉存在することになる。さらに言えば、例えば同じ一つの情報（このように表現しうるかどうかは議論の余地があるが）に対して別の解釈をする可能性もある。いわば、外部から見れば、ある一つの場を共有する複数の主体が存在し、そのうちの一個の主体 A から一つの情報が発信され、それを異なった意味に解釈する諸主体がいるというように見える。しかし実際のところは、B という受け手に対してと、C という受け手に対してと情報は一つではなく〈複数〉存在し、B と C は場を共有しているように見えて、それぞれが異なる場を生成させてしまっているわけである。同じ空間と情報を共有しながら、ある人々は情報=贈り物を受け取ったと感じ、ある人々は情報を受け取ることができない。ある人々は情報の場を形成し、ある人々は情報の場を作り上げることができない。このような複数性あるいは多元性が無限の情報空間を開くのである。

このような空間において受け手である B と C は A に直接返礼する必要はなく、返礼としての情報の贈与は、別のグループの中で別の文脈でなされても構わない。情報を情報として受け取ることができなかった D や E といった主体は、別のグループで情報の送り手となるかもしれない。あるいは、時間的にずっと後になって、D や E が A の情報を贈与として受けとめることができるかもしれない。情報の贈与と返礼は至るところで生成するが、すべてが必ずしも意識的になされるわけではない。しかしながら生成のこの複数性と多元性がコミュニケーションを豊かにし、情報を増大させるのである。

### (3) バタイユの〈消費〉

『贈与論』が提起するもう一つの側面は、ポトラッチという、贈与がいわば極限にまで押し進められ事物

の破壊にまで至る習俗から引き出される。北西アメリカ原住民が行うポトラッチの奇妙な特徴は、相手に贈り物を与えるだけに留まらず、一旦相手に誇示した品物を破壊し投げ捨ててしまうという点にある (Mauss, 1923-1924:10)。このような破壊行為は有用性や合理性だけでは説明できない。彼らは富を破壊する。バタイユはここに「有用性の彼方の〈消費〉」 (見田, 2011:118) を見る。

バタイユの言う蕩尽 (消費、消尽とも訳される。バタイユ自身は *dépense* あるいは *consumation* といったタームを用いる) は、単なる奢侈を意味するわけではなく、確かにバタイユは、禁忌とされる領域を敢えて侵犯することによる人間の歓びを語る。それはあるときは暴力という形を取り、あるときは蕩尽という形を取る。聖性や至高性を目指すこともあれば、単なる無駄な消費や有害なエネルギーに見えることもある。しかしながら蕩尽は、必ずしも贅を尽くすことに留まらない。むしろ強調すべきは、有用性や合理性という基準では捉えることのできない次元で人間は事物を〈消費〉するということである。そのとき、大量生産→大量消費→大量廃棄のサイクルに巻き込まれることなく、事物を消費し尽くすことができるだろう。その意味において人間は資源の枯渇をできる限り遅らせることが可能となる。しかしながらそれを〈消費〉する側からすれば、資源の有限性に立ち向かうことそれ自体を目的としたり義務と感じたりする必要はない。要請されているのは、芸術を鑑賞し、自然を愛で、生きることの歓びを情報の無際限性を生かしながら味わい尽くすことである。

言うまでもなく、情報の無際限性、情報の蕩尽は常にポジティブな側面のみを見せるわけではない。サイバースペースでは、言葉による暴力 (それは誹謗中傷や炎上といった形で起こる) が歯止めの効かない形で助長されるといった現象が見られる。先に述べた金融資本主義の暴走もまた実際は同じ構造を持っている。

このような現象を助長するのは、サイバースペース上における身体性の希薄性である。より正確に言えば、身体性の忘却である。それゆえ一旦暴走し始めると、言葉が言葉を、情報が情報を生み出し、それらを押しとどめるものがなくなってしまう。次節で検討するが、興味深いのは、一見私たちは理性によって身体をコントロールしているようでありながら、実際のところ、身体が精神のある種の錨であり、理性の行き過ぎを留める役割を果たしているということである。精神も身体も単独では過剰になる。

そうだとすれば、両者をいかに合一させるか、両者が見事に調和する相をどのように実現させるかが問題となる。私たちの情報体の議論はこの問題に一つの手掛かりを与えよう。

### 3. 情報体

#### (1) 二項の区別と合一

情報体とはいかなる概念であるのか。概観しておきたい。この概念はデカルト的二元論を積極的に発展させることによって得られた。すなわち、二元論を単な

る二項対立ではなく、二項の区別と合一との両立を目指す理論として捉え直すのである。そのような (一見矛盾するように思われる) 二項の区別と合一とが両立している状態を情報体と呼ぶ。例えば精神と身体との区別と両立、情報の物理的側面と意味的側面の区別と両立といったものがそれに相当する。それだけではなく、精神と身体の一合したものの ---- 仮に主体と呼ぼう ---- と情報との区別と合一、集合体や共同体における個と全体の区別と合一といったもののへとこの概念を広げることができる。

さて、情報は商品に付加価値を与えることができ、人々はそれに対して対価を支払うことを厭わない。商品は情報体として事物的側面と意味的側面を担いつつ流通する。既に見たように私たちは、事物に対するそのような接し方が、近代性に由来するものではないことを知っている。情報の与える付加価値はマオリ族における「ハウ」に相当し、現代社会は「ハウ」に満ち満ちているとも言えるのである。

逆に言えば、人々に関わることをない打ち捨てられた事物にハウは宿らない。もし、何らかの石に対して注意を払う人間が誰一人いなければ、その石は情報体ではない。しかし、その石に対して何らかの付加価値を見出したり (例えば思い出の地と結びつける)、その存在の特殊性を認めたりする (例えば宗教的意義を見出す) のであれば、そのとき石は情報体へと変容する。事態はテキストや芸術作品であっても同様である。誰も読まないテキスト、誰からも忘れ去られた芸術作品は、それ自体価値を内包し情報体として存在しているわけではない。その物理的側面と意味的側面の二項を合わせて捉えることによって生ずるのが情報体というあり方なのだ。

#### (2) 身体的重要性

情報の蕩尽の均衡を図るために、精神と身体との二項を併せ持つという点を強調することができよう。情報が思想や意味を、価値についての議論を置き去りにして暴走すること (米山, 2011:398) は、見田がその縮小を願う貧富の格差を広げてしまう。これは一見、事物的な側面 (身体的側面) の暴走のように見えて、実際は、意味的側面 (精神的側面) の暴走なのである。制作や製作という身体性から切り離されて商品は流通する。当初の価値以上のものをそこに付与するのはまきに行き過ぎた精神の力なのである。しかしながら、商品がまとう身体性、情報がまとう身体性を捉え直すことによって、暴走の歯止めがなされるのである。

中沢新一はこのような暴走を食い止めるため、自然 (それは人間に純粋な贈与をなす存在である) との関わり方の見直しを提唱する (中沢, 2003:144-160)。

「愛」をもって自然と接すること。「愛」とは要するに、合理的な経済における交換原理では捉え切れない人々の心性であり傾向である。「愛」は返礼であり尊重であり贈与である。精神をつなぎ止める身体性を纏ったリアルと接続するために、中沢は敢えて経済における愛を語り、倫理の一つの形を提起する。

#### 4. 贈与を基礎とするコミュニケーション

##### (1) サイバースペースの倫理

情報は一人で抱え込んでいても私たちに何ももたらさない。それはボールゲームの比喻によって理解される。セールやピエール・レヴィは、サッカーやラグビーのボールを情報に喩える (Serres, 1980:303)。ボールはゴールされねばならないという大きな目標をまとっているが、だからといって選手は闇雲にシュートを放つことはしない。相互になされるパスは、情報が次々と受け渡され、ネットワークを形成していくことを暗示している。また、ボールが誰か一人の選手によって占有されてはゲームが成り立たない。まさに情報は送られねばならず、贈与されねばならないのである。

サイバースペース上で罵詈雑言が書き捨てられたり、おおよそ意味のない書き込みが繰り返されたりすることがある。だがそのような情報を贈り物として受け取ってくれる他者はおそらく一切現れないであろう。贈与が成立しない (受け手が現れない) ということは、まさにマオリ族のハウのように、そのような情報の書き手を蝕む。ハウは祓われぬ。なぜなら、彼 (女) らの発言は、常にノイズとして処理され、今後の贈与や返礼へと繋がる情報とは見なされないからである。彼 (女) らの発言は、決してネットワークを形成することなく、贈与と返礼のシステムに組み込まれることもない。自ら情報ネットワークの豊かさに背を向けてしまっている。

これはまさに情報の倫理の一側面を表している。もし人々が無際限の情報空間の恩恵に与りたいと願うのであれば、情報を贈与と見なし返礼をするという礼儀作法を身につけねばならない。情報空間の恩恵は単なる利潤や合理性を意味しない。むしろ有用性や効率性とは程遠い何ものかを得ることを意味しよう。だがそれは確かに私たちに豊かにするのである。

情報は退蔵されても一方的に送られても、豊かなネットワークを形成することはできない。贈り物は受け取られねばならないし、返礼もされねばならない。無駄や過剰を廃するばかりでもいけないし、利益を占有してもならない。まさに「修道士の生活も、シャイロックの生活も避けなければならない」 (Mauss, 1923-1924:93) のである。それらはしかし、私たちの世界の〈多様性〉と〈自由〉の根源なのである。

人間は必要性のみに支えられて生きているわけではない。生命維持は人間の基盤ではあるが、人間的な精神と身体とを駆動するのは、一見不必要なものの蕩尽にある。言い換えれば、芸術やコミュニケーションが人間性を担保するのである。人類学的見地に従えば、人間と他の動物とを分かちるのは、例えば葬儀、祭祀、芸術等々である。普通物事は効率的に運ばれることが目指されるし、情報に関しても同様である。無駄を省き効率性を図ることは、一見、非常に理性的な目標のように思われる。しかしながら効率性や合理性のみを押し進めることは、実のところ、最も人間的な部分を失うことでもある。むしろすぐには意図のわからない行動や事象、効率性や合理性の敵と思われる事柄こそ人間性の鍵が隠されている。

芸術は、もし経済活動に関わるのであれば、否応なしに貨幣経済へと巻き込まれ、好むと好まざるとにかかわらずある一定の貨幣価値を付与されてしまうだろう。だがその価値は芸術を構成する一要素に過ぎず、贈与の枠組みの中で考えれば、先人の贈り物を受け取り返礼するというコミュニケーションの流れの中に位置づけられる。それは、貨幣のよる価値づけとは全く別の次元で起こり、制作者や鑑賞者を駆動する。貨幣によって見えにくくなっているが、人間を動かすのは目に見える利益だけではない。根源的なのはむしろ贈与である。

##### (2) 贈与-返礼システムにおける相互的修習

レヴィの提唱する相互的修習の考え方もまた、このような贈与の枠組みで理解することができよう。レヴィは自己と他者との間に生ずるコミュニケーションを相互に教え教えられるという関係によって説明する (Authier et Lévy, 1998)。そのとき、その倫理的側面を担保するために知を退蔵しないこと、他者から何かを教わったら金銭によってではなく、誰かに何かを教えることによって返礼することを義務づけようとする。この相互的修習を最も卑俗な形で理解すると、誰かに何かを教わったらお返しにその相手にも何かを教えるという非常に限定された等価交換図式が生じてしまう。しかしながら、情報を贈与として受け取りそれを全く別の他者へと (それは時代をも空間をも軽々と超越するような他者である) 返礼することによって、相互的修習の円環は閉じることなく、無限に広がっていくことであろう。

##### 参考文献

- 1) 清水高志 (2009) : 『来るべき思想史』, 冬弓舎。
- 2) 中沢新一 (2003) : 『愛と経済のロゴス』, 講談社。
- 3) 見田宗介 (2011) : 『定本 見田宗介著作集 I : 現代社会の理論』, 岩波書店。
- 4) 米山優 (2011) : 『情報学の展開』, 昭和堂。
- 5) Bataille, G. (1949) : “La part maudite”, Éditions de Minuit, 生田耕作訳, 『呪われた部分』, 二見書房, 1973。
- 6) Baudrillard, J. (1970) : “La société de consommation”, Éditions Planète, 今村仁司, 塚原史訳, 『消費社会の神話と構造』, 紀伊國屋書店, 1979。
- 7) Lévy, P. (1994) : “L’intelligence collective”, La Découverte。
- 8) Authier, M. et Lévy, P. (1998) : “Les arbres de connaissances”, La Découverte。
- 9) Mauss, M. (1923-1924) : “Essai sur le don : Forme et raison de l’échange dans les sociétés archaïques”, L’année sociologique, seconde série, P.U.F., 吉田禎吾, 江川純一訳, 『贈与論』, ちくま学芸文庫, 2009。
- 10) Serres, M. (1980) : “Le parasite”, Éditions Grasset et Fasquelle, 及川馥, 米山親能訳, 『パラジット: 奇食者の論理』, 法政大学出版局, 1987。